

## 原著論文

### シェイクスピア『ヴェニスの商人』に関する一考察

#### A Study of *The Merchant of Venice* by Shakespeare

菊池 せつ子

Setsuko Kikuchi

#### Abstract

The first printing of William Shakespeare's *The Merchant of Venice* in 1600 suggests that it was a popular play. The whole play is kept moving by a series of scenes of testing or trial, all of them culminating in the courtroom scene of Act 4, with the final resolution of Act 5. Bassanio submits Antonio, a merchant of Venice, to the first test of the play. So the theme of 'the divine state of friendship' is first sounded in the play.

The main plot of the play concerns a merchant, Antonio who, tested by his friend, Bassanio, places himself in the power of his enemy, Shylock, a Jewish usurer, all for love of his friend. The subsidiary plots of the play depend on this and amplify it: the test of the caskets, with Bassanio's winning of Portia and the eventual rescue of Antonio; Lorenzo's elopement with Jessica and the losses (of his daughter and his money) which strike him just as the merchant was stricken. Shylock may be the devil, but he is a human being. It is not therefore that he has been looked upon as a deeply wronged and tragic figure. But we can see the same racial or religious issues as those at the news of Today in this comedy which has modernity.

Shakespeare very skillfully links the main plot with its sub-plot: Bassanio's venturing on the test of the caskets. No sooner Bassanio wins Portia, than stormy news blows in from Venice and he goes to Venice to rescue hazarded Antonio all for his sake.

The trial scene where the main plot and sub-plot intertwine, brings together, in a situation full of suspense, the contrasted and colorful characters of the play. On the deeper level of moral debate, given his theme of the difference between justice and mercy, Shylock insists on the letter of the law, while witty Portia, listening intently gets her clue from his words and leads to the successful outcome of the trial scene, the victory.

The final resolution comes at Belmont. When two men arrive from Venice after Portia and Nerissa returned, quarrels break between two pairs of lovers about the rings the women gave each lover, but with the merchant once again being ready to hazard all for his friend. Portia jests as she returns the ring she originally gave Bassanio and reveals her part in Antonio's rescue. The play ends happily, of miraculous return of Antonio's ships, which is one of characteristics in Shakespeare's comedies.

Key words : Mercy and Justice, the Divine State of Friendship, the Test of Caskets, the Tragedy of Jew Shylock

## はじめに

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) は 37 篇の戯曲 (悲劇・喜劇・史劇) とソネットと言われる詩篇を書いた。

シェイクスピアに関してはこれまでに、それこそ膨大な研究、文献の発表が積み重ねられてきたし、現在もその動きは止むことがない。実際、この数年、英米では彼の生涯を取り上げた書物が数多く出版され、その翻訳も多く出版されている。またシェイクスピアの戯曲も次々と意欲的な新訳が試みられ、日本におけるシェイクスピア劇の上演もますます活発に行われている。それだけシェイクスピアという劇作家が魅力に富んでおり、彼が残した作品が現代でもなお人々の心を惹きつける力を持っている証拠だと思われる。

シェイクスピアは劇壇人 (役者を経て座付き作家となる) として活躍しかけたとき、家庭の事情 (父親の経済的破綻) で大学を出ていない。そのため彼は、大学を出た当時の知識人たちによって、やっかみも手伝ってか「成りあがりもの」と嘲笑され、ギリシャ・ラテン文学などについての教養の低さを指摘されたりもした。それは確かに彼の一種の欠陥であったかもしれないが、しかし彼が一番嫌ったのは机上の空論、観念のための観念、血の通っていない哲学だったろうと、思われる。つまり、シェイクスピアにとっては、観念や教養よりも、現実や常識、または土着的なものへの愛着が重要であった。人間関係にあまり関心の無い人、生きることに怠惰な人はシェイクスピアに興味をもたないかもしれない、だが、喜びや悲しみを味わいながら生活している人なら誰でも、彼の戯曲の台詞に、共感できるものを見つけることができると思われる。

彼の作品は、悲劇・喜劇を問わず、必ずと言っていいほど、裏切りや忘恩、中傷や欺瞞などに触れる台詞やエピソードが出てくる。きっと彼も、実人生において、傷ついたり恨んだりした経験が多かったのだろうな、と思われるほどである。だがそれでもなお、人間にはそれを上回るぐらい愛すべき点、賞賛したくなる点、自分が人間であることを誇らしく思われる点があることを、シェイ

クスピアは彼の作品の中で見せてくれる。だからこそ、傷ついたり辛い思いをしたりしている我々も、彼の作品によって慰められたりするるのである。それが彼の作品が古今東西を問わず、国籍・人種・年代を超えて愛される所以であると思われる。

シェイクスピアは、彼の作品の登場人物を描くとき、どういう視点から見ているかという、彼らを取り巻く人間関係を通して見ている。親子、兄弟、夫婦、恋人、友人、敵味方、主君家来、いろんな「人間関係」において見ているのである。ギリシャ悲劇などは人間が孤立して運命と対立し、その運命と闘って敗れていく、ところがシェイクスピアの場合は、孤立して運命と闘うのではなくて、あくまで人間関係の中で喜んだり、悲しんだりする。つまり人間関係の中には、必ず喜怒哀楽の感情が流れており、感情が沸き上がらないところに人間関係は無いと言える。

人間の感情、つまり喜び、悲しみ、怒りというのは、古今東西の歴史の中でそう変化するものではないので、400 年以上が経ち世紀が変わっても、なおかつ世界中の肌の色や、髪の毛の色が違う人も感動するのは、人間とはこういう感情の生き物なんだと発見、再発見させてくれるからであり、それが我々を感動させてくれると思われる。

シェイクスピアは劇作家として、習作期に続き 1600 年頃までの前期の時代と言われる数カ年、彼はもっぱら『ヴェニスの商人』 (*The Merchant of Venice*, 1596~97 年頃初演) や『十二夜』 (*Twelfth Night*, 1599~1600)、『お気に召すまま』 (*As You Like It*, 1599~1600) などの喜劇、『ヘンリー四世』 (*Henry IV*, 1597~1598) や『ジュリアス・シーザー』 (*Julius Caesar*, 1599~1600) などの史劇を書く。そして『ハムレット』 (*Hamlet*, 1600~1601) をはじめとする『オセロー』 (*Othello*, 1604~1605)、『リア王』 (*King Lear*, 1605~1606)、『マクベス』 (*Macbeth*, 1605~1606) などの四大悲劇を書いた後期の時代へと入っていく。

上述したように、シェイクスピアの戯曲の登場人物は、あくまでも彼らの人間関係の中で息づいており、傑作と誉れの高い四大悲劇の主人公 (ハムレット、オセロー、リア王、マクベス) を始め、登場人物たちは、親と子、夫と妻、主人と召

使、恋人や友人や敵同士などの人間関係のしがらみから切り離されて描かれてはいない。

シェイクスピアは20代半ばから40代後半まで、悲劇・喜劇・歴史劇と様々なジャンルの戯曲を37本書いたが、本稿では本学創立20周年を記念して、悲劇ではなく喜劇の傑作の一つと評判の高い『ヴェニスの商人』に焦点を当て、シェイクスピアが彼の作品で追求したテーマ「人間とはいかなる生き物であるか」について考察する。

## 1. シェイクスピアの時代と彼の「人生観・人間観」

シェイクスピアが生きた16世紀時代は、「ルネサンス（Renaissance）」と呼ばれ、一般的には14世紀から16世紀にかけて、イタリアを中心に起こり、ヨーロッパ各地に広がった学問・文化の革新運動のことであり、その中身を一言で言えば、「中世を飛び越えてギリシャ・ローマの古典に返れ」である。中世という時代はキリスト教文明が人間の精神生活を支配しており、その学問の中心はキリスト教神学であったが、ルネサンスはギリシャ・ローマ時代がキリスト教の倫理観に支配されない時代、つまり、「人間万歳、人間を謳歌する時代」として捉えられていて、「自然に返れ、人間に返れ」という運動である。

シェイクスピアが生きたエリザベス朝時代の人々は、中世の文化を支配していたキリスト教神学を飛び越えて、ギリシャ・ローマを学ぶことによって人間性を育成しようとした。人間性を回復するのは、神がすべてを決めるのではなく、人間の価値観、その良いところを認め、「自我」を発見するということであり、それが近代ということになる。そういう大きな流れの中で言うと、シェイクスピア自身はキリスト教徒であったが、同時にルネサンス人でもあったと言える。政治や宗教の争いに巻き込まれて死んだ人も大勢いたが、その中をシェイクスピアは生き抜いた。

このルネサンスの時代の中で、シェイクスピアは人間を愛し、人間にこだわり、人間の生きている姿を描いた劇作家である。人間とは、愛したり

憎んだり、笑ったり泣いたり、悩んだり決断したりして、生きていくものなのだ、と感じさせてくれるのが彼の戯曲と言える。

彼の描く作品の登場人物たちは、「人間万歳」と唱えつつ、人生を謳歌する人間が多く登場する。だからといって人間はこう生きるべきだといった説教くさは微塵も感じられない。人間は喜んだり、悲しんだりする存在として描かれ、こうすべきだと言わず、押し付けがましくないところがシェイクスピアの戯曲の特徴と言える。劇作家には二つのタイプがあって、一つは信念、理念を観客に伝えたい、教えたいと思っている作家がいるが、シェイクスピアは、観念とか理念ではなくて、感情豊かな生身の人間を描こうとした作家であると言える。

シェイクスピアの「人間観」という場合に、よく言われるのは「一步引いてみる目の達人」だということである。つまり傍観者としての目を持った作家ということである。では、そのシェイクスピアの「人間観」がどのように形成されたか、彼の原体験について述べることにする。

シェイクスピアは、1564年4月23日にイギリスのスラットフォード・アボン・エイヴォンという小さな町に生まれた。父親はジョン・シェイクスピア、母親はメアリー・アーデンで、父親は皮革加工業などをやって成功していた。商人として成功した父親は、シェイクスピアが生まれた翌年、町会議員になり、シェイクスピアが4歳のとき町長にまでなったと言われている。つまりシェイクスピアは町一番の名士の子供（お坊ちゃん）であった。しかし彼が13歳のとき、父親が何らかの理由で、経済的に没落してしまい、初等教育しか受けることができなかった。

幼年期に幸せを知ったものが、少年期に没落するという体験によって人間は、個人の力ではどうしようもできない幸福もあれば不幸もあるという「人生観」を持ったとしても不思議ではない。幼少期のシェイクスピアは、町を歩くと誰もが笑顔でちやほやしたが、少年期になって没落すると皆がそっぽを向き、背中を向けるようになった。表面ではニコニコしていても何を考えているかわからない。そしてその愛嬌のよさがいつ豹変するか

わからない。「人間には表もあれば裏もある」、このことは彼が少年期に、第一番に体験的に見にしてみte感じたことであつたと思われる。

上述したように、シェイクスピアの戯曲の特徴の一つは、人間をその関係性において捉えているということであるが、それも彼の体験から影響を受けているように思われる。シェイクスピアは8人姉弟妹の3番目で長男として生まれ、二人の姉は早くに死んだために、彼は弟妹たちの面倒を見ながら育つた。大学に行こうとしても父が没落しているので行けず、18歳のときに8歳年上の26歳のアン・ハサウェイと結婚する。結婚して5ヶ月で長女スザンナが誕生。さらに1年ちょっとで長男ハムネットと次女ジュデイスの双子が誕生したのは、シェイクスピア20歳のときであつた。20歳で三児の父、しかも姉さん女房、子育てと仕事に汲々とした生活を強いられ、彼が息抜きをしたくなるのも理解できるというものである。

やがて、彼は単身でロンドンに出て、劇壇に関係することになるが、大家族の中で、自分というものをあまり強く主張すると家族関係が壊れてしまうし、とはいえ人間というのは一人で生きていくのではなく、心配りというか、家族、周囲の人たちとうまく折り合いをつけながら生きていくものだという「人生観」を持つに至つたとしても不思議ではない。

## 2. ダブル・プロットと複雑に絡み合う登場人物

この作品『ヴェニスの商人』の舞台は、当時の商業都市の中心地である、光まばゆいばかりのヴェニスの町と地方都市ベルモントである。登場人物は、宗教、民族、人種、経済的役割、家族関係などにおいて明確な違いが存在する。まずはヴェニス在住の「商人」であるアントーニオ (Antonio)、その友人バッサーニオ (Bassanio)、彼らの仇敵となるユダヤ人の高利貸しのシャイロック (Shylock) などの男性陣。さらに莫大な遺産を相続した富豪で、美貌の持ち主の貴婦人ポーシャ (Portia)、その侍女ネリッサ (Nerissa)、

さらにシャイロックの娘ジェシカ (Jessica) の女性陣など、様々なタイプの登場人物を配置し、興味をそそる幕開けとなっている。

登場人物を詳しく見てみると、主要な登場人物の一人は作品のタイトルが示しているヴェニスの商人アントーニオであるが、彼は誠実を身にまとつた人物として描かれている。現在、彼は理由が自分自身にも漠然としかわからない憂鬱の虫 (現代ならさしずめ鬱病と診断されそうな) に取り付かされている。そして、彼とは対照に喜劇の登場人物にふさわしい、いつも戯言を撒き散らしている、アントーニオの友人グラシアノ (Gratiano)、さらに贅沢三昧と借金のおかげで親友のアントーニオの助けが無ければ、見初めた女性への「求婚の旅」にも行かれないバッサーニオという青年などがこの喜劇を彩る。

この物語のメインプロットは、アントーニオが、親友バッサーニオによる頼み—富豪の貴婦人ポーシャへの求婚をしに行くための資金の借用の申し入れ—を受け入れ、バッサーニオへの友情から、自分自身の命運を仇敵である、強欲なユダヤ人の金貸しのシャイロックの手中に置くという物語である。一方、サブプロットであるポーシャの婿選びの顛末はメインプロットに依存しそれを膨らませる役割を担っている。そして、箱選びのテスト (the Test of the Casket、婿選びの試験) ではバッサーニオが、ライバルを退けて勝利し、大富豪のポーシャの愛を得る。最後に、投資していた海上貿易の船の難破によって破産し、シャイロックから借りたお金を返せなくなり、窮地に陥つたアントーニオを、バッサーニオたちが救い出すことになるというのがこの戯曲のストーリーである。観客があれこれ考えを廻らさざるをえない、身分、環境、人種などが異なる人物を次から次へ登場させて人間関係が絡み合い、シェイクスピアは観客に退屈する暇を与えない。

絡み合っている筋立てをもう少し具体的に述べると、身分は良いが金に困っているバッサーニオは、親友のアントーニオに言い訳を交えながら、一生に一度の頼みことをする。ベルモントという地方の町に、莫大な遺産を父親から相続したポーシャという美貌の貴婦人がいる。彼女に一目ぱれ

したバッサーニオは彼女に求婚をしたいのだが、三男坊である彼は父親からもらった財産も食いつぶして、求婚者として彼女にふさわしい支度が整えられない。

ついでにはアントーニオが、求婚の旅へ出かけるための資金を都合してくれないだろうか、というものだった。アントーニオは、自分の財産はすべて海上貿易に投資しているので、今すぐは工面できないが、自分のヴェニスでの富豪の商人としての信用を利用して、資金を借りてあげようと親友の頼みを快諾する。

そして、アントーニオとバッサーニオが、ヴェニスで金融業を営む高利貸しのユダヤ人シャイロックから、3000 グカットという莫大な現金を三ヶ月間、高利で借りることにする。これまで高利貸しのユダヤ人として軽蔑していた男から金を借りるのは、キリスト教徒であるアントーニオにとっては、面白くないが、親友を助けるために背に腹は変えられないというわけである。一方、借金を申し込まれたシャイロックは「遊び心」で利子を取る代わりに、借金の形に金銭と同じ重さの人肉を受け取ることを提案する。つまり、アントーニオが期限までに借金を返済できないときは、シャイロックが彼の体の肉を好きな場所から切り取ってよい、という契約書（ポンド）が交わされることになる。

アントーニオの友情によって、資金を得てベルモントへ赴いたバッサーニオは、ポーシャが父親の遺言によって言い渡された「箱選び」（婿選びのテスト）に合格し、念願どおりにポーシャと結婚する。さらにバッサーニオに同行した彼の友人のグラシアーノも、ポーシャの侍女と結婚することになる。だがその直後、祝福ムードの劇の流れに逆らうかのように、アントーニオの船がすべて沈没し、彼は破産の可能性がある、それと共にシャイロックの復讐への強い意志の知らせが舞い込み、お祝い気分が一気に消え去り、バッサーニオは試練に直面する。

そして、彼は自分のためにすべてを投げ打ってくれた親友アントーニオを救済するために、グラシアーノとともに未来の新婦たちを残し、急いでベルモントを離れヴェニスに向かう。一方、ポー

シャと侍女ネリッサも、アントーニオとシャイロックの裁判を審理するために、夫たちに知られぬように、男装して彼らの後を追う。

人間はどこまで友人を助けることができるか、どれほど友人のために捧げることができるかは、宗教的な含みを持つが、シェイクスピアはその点を強調しようとしてはいない。彼が描いたのは、アントーニオが友人のために「極限まで」尽くす心の用意があることを即座に示したことであり、この「心の用意」は後になってバッサーニオが、自分のために借りた借金の形に、「胸の肉を切り取られる窮地」に陥ったアントーニオ救済のために、即座にヴェニスに向けて出立することを決めるときのそれと対応する。こういう具合に、この作品は「神のごとき友情」(the divine state of friendship) のテーマが、まず第一に取り上げられる。

さらに、この戯曲は「試し」(test)や「裁き」(trial)の場面が連続で進行するようになっており、そのすべてが第四幕の「法廷の場」(The scene of trial)で集約される。そして、この作品のハイライトともいえるべき第四幕の法廷の場面で、復讐の鬼と化したシャイロックはあくまでもアントーニオが自分の身体で借金を返すことを求め、そこにポーシャがシャイロックの要求に決着をつけるために、法廷に男装をして法学者と称して現われ、いわゆる彼女の機転の利いた大岡越前張りの有名な名台詞を吐き、アントーニオは一命を取り留め、裁判は一件落着する。

最後に物語は第五幕の大団円へと導かれ、アントーニオの船がすべて沈没したというのは誤報であったことが判明する。さらにバッサーニオと未来の新妻のポーシャと、彼の友人グラシアーノとポーシャの侍女の結びつきの強さと、バッサーニオとグラシアーノが手放してしまった指輪をめぐるあまり深刻でないテスト（男性陣の婚約者たちへの愛の強さが試される）で、アントーニオがもう一度彼の友人バッサーニオのためにすべてを賭けるはめになる、カップルたちが危機に瀕する喜劇的な軽い指輪をめぐるエピソードで、物語は喜劇特有のハッピーエンディングの終幕となる。

この作品が描いているのは、自分を常日頃から

侮辱している憎いキリスト教徒のアントーニオの殺害を、公然と目論んだユダヤ人の高利貸しシャイロックが、ポーシャの知恵に負け、逆に自分の企みに足を掬われ、痛い目に遭うという、一見勧善懲悪の物語と言える。観客はアントーニオ、その友人バッサーニオ、そして彼の妻となるポーシャが一体となり、シャイロックを懲らしめるという構図となっている。

バッサーニオとポーシャの結婚をめぐる「婿選び」のサブプロットと、アントーニオとシャイロックを中心とするメインプロットとのダブル・プロットが緊密に絡み合い厚みを持たせている。こういう何の変哲もないお伽噺ないしは寓話のような物語を、生き生きとした登場人物と筋立てによって、観客をわくわくさせる血の通った物語に仕立てる才能は、まさにシェイクスピアの真骨頂である。

### 3. 人間の心の叫びを描く

では、サブプロットである「箱選び（婿選び）」について見てみることにする。莫大な遺産を受け継いだベルモントの美貌の貴婦人ポーシャは、父親の遺言で、自分の結婚相手を「箱選び」によって決めなければならない事態となっている。つまりポーシャに求婚する男は、金、銀、鉛の三つの箱のうち一つを選ばなければならず、そのうちの一つにポーシャの肖像画が収められており、それを選んだ者が彼女の夫となる資格を得るというものである。

最初に登場する求婚者は、肌が浅黒いモロッコの大公（the Prince of Morocco）である。この黒人のモロッコ大公は、「婿選び」のための条件である箱選びに失敗した場合は、直ちに立ち去り二度と女性に求婚してはならないという厳しい条件を受諾して、婿選びのための「箱選び」に挑戦するのだが、黒い肌を嫌うポーシャにとって幸いなことに、彼は金の箱を選び、ポーシャの像ではなく髑髏の像を箱の中から見つけ、婿選びから脱落し失意のうちに退場する。彼が立ち去ると、ポーシャは「ああいう肌の色の人は、みんなああい

う選び方をして欲しい」“Let all of his complexion choose me so.”<sup>1)</sup>（小田島雄志訳、これ以降特記なき限りは小田島訳）と述べる。

この台詞を聞いたとき、少なくとも一部の観客は、ポーシャの人種に対する多少の偏見を察知し彼女に対して距離をおかざるを得ない観客もいると思われる。この場合、劇中人物と観客の距離は、観客の道徳的判断の結果として生じるのである。さて、第二の求婚者も浅黒き肌を持つアラゴンの大公（The Prince of Arragon）であるが、彼は銀の箱を選ぶ。やはりこれも正しい箱ではなく彼も前者のモロッコ大公と同じく失望して、退出する憂き目を見る。

最後に、ポーシャが結婚を望んでいる本命の白人のバッサーニオが「箱選び」に臨むときには、観客は、ポーシャの肖像画が納められているのは鉛の箱であることをすでに知っている。果たしてバッサーニオが鉛の箱を選ぶかどうかという点について、観客は若干のサスペンスを感じるかもしれないが、劇中の人物である彼が中身を知らないということを承知している観客と、人生をかけて箱選びをしている登場人物バッサーニオの間には当然のこととして距離が生じていることは確かである。だから観客は、彼の行動やそれに伴う台詞を冷静に捉えることができるという余裕が生まれる。この場合の距離は、道徳的判断の好悪の念に基づくものではなくて、状況認識の差によって生じるものである。

物語のプロット上、「箱選び」の場で、ポーシャが夫にしたいとはっきり述べているバッサーニオが失敗することはありえない設定であり、他方、喜劇の世界にふさわしく仕立てられた二人の求婚者（モロッコ大公とアラゴン大公）は必ず失敗することになっている。作家シェイクスピアは、この二人の彼ら自身の性格に従って、それぞれ箱を選択させるからである。野心過剰のモロッコ大公は金の箱を、高慢であるアラゴン大公は銀の箱を選ばせ、彼らに、この作品の喜劇性を盛り上げるコミカルな役を担わせている。

この喜劇のサブプロットの主役の一人であるバッサーニオの場合は異なって、お伽噺の三人目の求婚者や三人の兄弟の場合がいつもそうである

ように、仕組まれている。その場面で、バツサーニオは熱心にポーシャが歌う歌に耳を傾け、人間は決して物事の外見に欺かれてはいけないという結論、「確かに外観は中身を裏切るものと言えそうだ」“So may the outward shows be least themselves.”<sup>2)</sup>を導き出し、見せ掛けだけの真実に惑わされること無く、みすばらしい鉛の箱を選び、首尾よく婿になるための「箱選び」のテストに成功する。

この「箱選び」の場面において、作者シェイクスピアは、ポーシャに黒人（モロッコ大公とアラゴン大公）の肌の色に関するポーシャの偏見について述べさせていたが、キリスト教徒にとっての異教徒であるユダヤ人のシャイロックに関して、彼はどのように描いているか、次に見てみることにする。

この作品でシェイクスピアは高利貸しのシャイロックがユダヤ人であることを、執拗に強調して描いている。それに伴って、アントーニオ、バツサーニオやポーシャなどの他の登場人物が、キリスト教徒であるという事実を観客は意識せざるを得なくなる。シャイロックとアントーニオたちの間には、出自においても信仰においても、重要な違いがあることを明瞭にしながら、彼は差別という深刻な問題を作品の中心の一つに取り上げている。

当時の大方の観客にとっては「善玉」として描かれているアントーニオに共感して、「悪玉」であるシャイロックを憎悪したり嘲笑したりしていれば、それで済むかもしれない。しかし現代の我々は、そういう単純で暢気な態度でだけこの作品を見てはいられない、深刻な世界情勢のニュースを見聞きする昨今である。我々はアントーニオたちとシャイロックのどちらも、全面的に肯定することもまた全面的に否定することもできない自分を発見するかもしれない。

この喜劇の全体的な構造から見れば、アントーニオの命を狙うユダヤ人シャイロックは確かに敵役として描かれているが、第三幕第一場で、シャイロックは自分がユダヤ人だからという理由で、キリスト教徒たちによって散々侮辱されたと言って、「ユダヤ人に対する差別」を激しく糾弾する

彼の台詞を聞くと、その迫力に息を吞まずにはいられない。

I am a Jew. Hath not a Jew eyes? Hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? Fed with the same food, hurt with the same weapons, subject to the same diseases, healed by the same means, warmed and cooled by the same winter and summer as a Christian is? If you prick us, do we not bleed? ... If you wrong us, shall we not revenge?<sup>3)</sup>

ユダヤ人には目がないか？手がないか？五臓六腑が、四肢五体が、感覚、感情、情熱がないとでも言うのか？キリスト教徒とどこが違う、同じ食べ物を食い、同じ刃物で傷つき、同じ病気にかかり、同じ薬で治り、同じ冬の寒さ、夏の暑さを感じたりしないとでもいうのか？針を刺しても血が出ない、(省略)ひどい目に遭わされても復讐しちやいかんとも言うのか？

人間としてのキリスト教徒とユダヤ人との間には何の違いもないという彼の主張は極めてまっとうで、それ自体としては全く反論の余地がない。こうして、シャイロックの心情が深く描きこめているために、彼を加害者ではなく、犠牲者として見たくなるのは否定できない。

さらに、この場合に限らず戯曲の台詞や効果は、どんな人物がどんな状況でそれを語るかを視野に入れて理解しなければならない。シャイロックが法廷に来る前、彼の娘ジェシカがロレンゾー(Lorenzo) というキリスト教徒の若者と駆け落ちをし、しかも父親であるシャイロックの金や宝石を根こそぎ持ち出して出奔してしまうという事件がおきる。シャイロックが怒り、悲しみに苛まされている所に、アントーニオが破産したという知らせが入ったというわけである。シャイロックのユダヤ人に対する差別糾弾発言は、彼のこういう人生どん底の状態の中で搾り出されたものである。

つまり、娘の駆け落ちという事件から受けた衝

撃によって、いやが上にもキリスト教徒に対する敵意を募らせていたシャイロックは、アントーニオの破産という願ってもない出来事に促されて、二重の意味で復讐を決意するに至るのである。キリスト教徒と異教徒のユダヤ人の間には違いはないという彼の主張は、彼の復讐を正当化するためになされる。キリスト教徒によって差別されるシャイロックが被害者であることは言うまでもないが、他方、彼は契約違反を盾に、アントーニオの胸の肉の切り取りを虎視眈々と狙う悪人でもある。悪人が、それ自体として極めてまともな差別に対する糾弾をするからこそ、つまり、観客がこの人物に対して共感と反感の両方を抱くからこそ、劇としてさらに盛り上がり、面白みが加速する。

キリスト教徒たちについても同じことが言えよう。アントーニオはバッサーニオのために命を捨てようとするほどの、友情に篤い人物だが、一方、アントーニオはユダヤ人シャイロックに対して、誰もが不快感を催さずにいられない差別を加える人物としても描かれている。しかし、アントーニオの振る舞いを擁護するわけではないが、シェイクスピアの時代のイギリスには、反ユダヤ人感情が渦巻いていた。元をたどれば、1290年エドワード一世が発布したユダヤ人追放令が活きていて、ロンドンにはユダヤ人がいわゆる非合法に住んでおり、正業に就けない彼らの多くが、人から嫌われる金貸し業を営んでいたという当時の状況がある。当時の大方のイギリス人同様、アントーニオは、金が利子を生むことを罪として否定しながら、やむなく彼らから金を借りることもあり、その罪悪感が屈折して反ユダヤ人感情に転化していったという時代的背景を背負った一人として描かれている。

戦争や異なった民族・宗教の対立は、もちろんシェイクスピアの時代からも多くあった。特に1594年、ユダヤ系ポルトガル人の医師ロデリコ・ロペスがエリザベス女王暗殺を企んだとの理由で、処刑される事件が起こり、本人は最後まで否定していたらしいのだが、現在と同様、当時の女王好きの国民感情を爆発させることになったのである。この作品は、その三年後に上演されたので、作品にはこの事件が投影されていると言われている。

では、シェイクスピアが世の中の出来事に対して、「人種問題」をどのようなスタンスで捉え、さらに「人種問題」を超えて、登場人物を「血の通った」人間として理解するために、彼がこの作品でどのような描き方をしているかを見てみよう。まず第一に、シェイクスピアは人物を描くとき、その人種や宗教に関係なく、その人の立場になって描いている。普通、主人公は自分の意見を代弁するものであり、敵役はそれに反対するものとしての立場をとり、それにしたがって台詞を述べる。ところがシェイクスピアの敵役の描き方の特徴は、敵役シャイロックの立場に立って、ユダヤ人だってキリスト教徒と同じじゃないかと、彼の心の内側から発する魂の叫びまで描いてしまうことにあ

る。当時ユダヤ人は、上述したようにユダヤ人というだけで反感を買ったのだが、シェイクスピアはユダヤ人を「人種問題」としてではなくて、シャイロックという人間を描こうとして、彼の気持ちを優先して彼に台詞を言わせている。一般的な劇作家は、主役だけに顔を向けて、脇役のこと等考えてない場合が多々あるが、シェイクスピアは、どんな端役だろうが敵役だろうが台詞を言っているときは、主人公意識、つまり、自分は世界の中心にいるという感覚で語らせている。シェイクスピアは、王だろうが、市民だろうが、庭師だろうが、台詞を言っているときは、世界の中心にいると登場人物たちに主人公意識を持って台詞を言わせ、また観客にも思わせようとする。

「一万人の心を持つシェイクスピア」<sup>4)</sup>とも言われるが、彼は一万人の人間を描けば、一万人の心を描き分けてしまう。普通なら、シャイロックは敵役だから、最後まで憎憎しげに描けばいいのに、彼は人間シャイロックの気持ちに入ってしまう。シェイクスピアは、「人種問題」を、国家、民族の問題として捉えずに「人間の問題」として、つまり、どんな悪いやつでも人間であるという態度で接している。そして様々な登場人物が台詞を言うとき、その人物の気持ちを込めるところが、シェイクスピア戯曲の特徴の一つと言って良いだろう。



#### 4. 「慈悲」対「正義」—ユダヤ人シャイロックの悲劇

メインプロットとサブプロットが絡み合う第四幕第一場の法廷の場は、サスペンスに満ちた状況下に劇中の登場人物—ヴェニスの商人アントーニオ、復讐の鬼と化し返金を迫るユダヤ人の高利貸しシャイロック、親友の窮地を救うべく駆けつけたバッサーニオ、さらに男装し法学者に成りすましたポーシャなど—が一堂に会することになる。そして、作者シェイクスピアはこの喜劇のクライマックスとも言うべき法廷の場で、シャイロックとポーシャに深いモラル論を展開させ、興味深い舞台を構成し、「慈悲」と「正義」の対峙の構図を浮かび上がらせる。

上述したように、キリスト教徒と最愛の娘の出奔と彼女が持ち出した財産の喪失を嘆き、シャイロックは失意のどん底にいる。怒り心頭の彼は、アントーニオが投資した船が難破したとの情報を耳にし、彼が破産必至と見て、アントーニオの返金の期限切れを盾に、彼への復讐を強く誓う。この息詰まる法廷の場ではあるが、ポーシャやバッサーニオには彼らの未来を象徴するかのよう、明るい健全な人間観、世界観が満ち溢れており、一方敵役であるシャイロックには暗い屈折したそれらが立ち込めている。

シャイロックは、アントーニオが期限までに貸した金を返さなかったので、証文どおり彼の体の肉を一ポンド切り取らせてもらいたい、と法廷に訴え出る。そして、彼はヴェニス大公（The Duke of Venice）の説得にも応じようしない。その理由はただ「アントーニオに対して抱いている憎悪と嫌悪の情」“More than a lodged hate and a certain loathing I bear Antonio”<sup>5)</sup> だけだと高言し、証文どおり彼の胸の肉一ポンドを受け取りたいと、執拗に繰り返す。そのシャイロックに、バッサーニオは、「好きになれなきゃ殺す、人間ってそんなものか？」“Do all men kill the things they do not love?”<sup>6)</sup> と応戦し、貸し金の二倍、三倍にして返すから証文を取り消すように頼むが、シャイロックは「憎けりゃ殺したくなる、人間ってそんなもんだらう？」“Hates any man the things he

would not kill?”<sup>7)</sup> と言いつち、バッサーニオの懇願の言葉にまったく聞き耳を持たず、頑なに受け取りを拒否する。

そして、いよいよこの劇の山場のシーンとなっている「人肉裁判」へと突入することになる。ヴェニス大公はシャイロックに、アントーニオの不運を哀れむように要請するが、シャイロックは頑として譲らない。そこで大公は、バルサザー（Balthasar）という名のローマの若き法律家（ポーシャが変装）に法廷を任せる。男装して法学博士に成りすましたポーシャは、証文が合法的である以上、アントーニオを救うには「シャイロックの慈悲に待つほかない」、*“Then must the Jew be merciful?”*<sup>8)</sup> と述べる。そして、シャイロックに「慈悲」を施すように促すが、彼は「慈悲」を求める彼女の声をにべもなく跳ねつけ、「そんな義務はない」*“On what compulsion must I?”*<sup>9)</sup> と取りつく島もないシャイロックの非情な言葉を返す。そこで、シャイロックに対して、ポーシャは「慈悲」を強調する有名な長台詞を述べるわけだが、その冒頭を引用する。

The quality of mercy is not strained:

It droppeth as the gentle rain from heaven

Upon the place beneath.

It blesseth him that gives and him that takes.<sup>10)</sup>

慈悲は義務によって強制されるものではない、天より降りきたっておのずから大地をうるおす恵みの雨のようなものなのだ。祝福は二重にある、慈悲は与えるものと受けるものとをともに祝福する。

ポーシャが台詞の中で指摘している通り、「慈悲はその本質からして強制されるものではなく」、法廷で無理強いできるような性質のものではないのである。ある特定の事件について、相手が「慈悲」を返すべき義務があるなどと証明できない。どんな裁判所に持ち出しても「慈悲」を返済しろなどと要求することはできない。慈悲はその本質からして、強制や義務とは無縁の、自由意志に関わることだからである。「慈悲」は、本来物質に関わるのではなく、精神に関わる問題である。計

算したり分割したりなどできる性質のものではない。愛についてと同様、「慈悲」についても同じことが言えるだろう。なぜならどちらも精神の世界に属しているからである。

さらに、ポーシャは愛や「慈悲」の比喻として、慈悲を「天上から地上に降り注ぐもの」というように水に喩える。そして彼女は、冒頭に引いた台詞のあと、「慈悲」の特質をさらに説明して、「それは天にまします神ご自身の表象なのだ」<sup>11)</sup> “But mercy is above this sceptred sway, It is enthroned in the hearts of kings, It is an attribute to God himself”<sup>11)</sup> と説くのであるが、これはそのまま、実は天上の「慈悲」の本質なのである。

さらにポーシャは、シャイロックの頑なな心に訴えるように続ける。

Though justice be thy plea, consider this:  
That in the course of justice none of us  
Should see salvation. We do pray for mercy,  
And that same prayer doth teach us all to render

The deeds of mercy. I have spoke thus much  
To mitigate the justice of they plea<sup>12)</sup>

正義のみ求めれば、人間誰ひとり救いにはあずかれまい。そこでわれわれは慈悲を求めて祈る、

その祈りそのものが、われわれに慈悲を施せと、教えているのではなからうか。こういう話をしたのもおまえの要求する正義をやわらげようと思えばこそだ

ここには、ポーシャの口を通して、シェイクスピア自身の「人間観」が響いているように思われる——人間誰でも、弱い部分、愚かな部分があって、過ちを犯しやすいものなのだから、「正義」を押し通すよりも「慈悲」によって許しあうことのほうが人間的ではないかと。そのようなポーシャの「慈悲」を求める言葉に対して、シャイロックの答えは、非情なまでに冷徹な「私は法律を、証文どおり借金のかたを要求します」<sup>13)</sup> “I crave the law, the penalty and forfeit of my bond”<sup>13)</sup> であった。

そこでポーシャは、シャイロックの言葉に注意

深く耳を傾け、機知を働かせ、彼の言葉から逆転の決め手を掴むことになる。一方復讐しか頭にならないシャイロックは法律の字句にこだわって自ら自滅の深みにはまって行く。彼は己の行為の結果を背負って真逆様に転落することにも気付かず、証書の文言どおりの裁定を求め続ける。かくして彼は、自分を打ち倒す武器をポーシャに与えてしまうことになるのだが、シャイロックと彼女とのやり取りは非常に興味深い。「肉一ポンド」をめぐる二人の行き詰るやり取り見てみることにする。

POTIA. Shylock, there's thrice thy money offered thee.

SHYLOCK. An oath, an oath! I have an oath in heaven; Shall I lay perjury upon my soul? No, not for Venice!<sup>14)</sup>

ポーシャ・シャイロック、この金を三倍にして返せばどうだ？

シャイロック、…私は天に誓ったのです。誓いを破る罪を私の魂に負わせろと？とんでもない、ヴェニスの一國と引きかえでもおことわりだ。

ついに、ポーシャもシャイロックの要求が証文によって正当なものであることを認め、ヴェニスの法に依れば、誰も証文どおりにアントーニオの心臓の近くの肉一ポンドの切除を防ぐことができないと決定する。それに従って、まさにシャイロックの包丁がアントーニオの胸を切り裂こうとする瞬間、ポーシャの大岡越前張りの機知に富んだ名台詞が炸裂する。

POTIA. Tarry a little, there is something else. This bond doth give thee here no jot of blood; The words expressly are 'a pound of flesh'.

Take then thy bond, take thou thy pound of flesh, But in the cutting it if thou dost shed

One drop of Christian blood, thy lands and goods

Are by the laws of Venice confiscate Unto the state of Venice.

SHYLOCK. I take this offer then. Pay the  
bond thrice

And let the Christian go. <sup>15)</sup>

ポーシャ. 待て、あわてるな、まだ申しわたすことがある。この証文によれば、血は一滴もおまえに与えてはいない、ここに明記されているのは「肉一ポンド」だけだ、したがって証文どおり、肉一ポンド受けとるがいい、だが切りとるときに、もしキリスト教徒の血を一滴でも流せば、お前の土地・財産はすべて、ヴェニスの国法に従い、国庫に没収される、そう心得るがいい。

シャイロック. じゃ先ほどの申し出を飲みます。三倍の金額でこのキリスト教徒を許してやりましょう。

ポーシャは、証文は確かに「一ポンドの肉」と書いてあるが、どこにも血を流していいと書いてない、もしキリスト教徒の血を一滴でも流したら、お前の全財産は国庫に没収と告げる。

さらにポーシャのシャイロックに対する容赦ない厳しい判決は続く。最終的に、シャイロックは自分の命を救ってもらう代わり（ヴェニス市民の命を狙った場合、死罪となる）に、彼の財産の半分は国ものとなり、そして残り半分の財産も彼の死後、ロレンゾー（娘の駆け落ち相手）のものとなることとキリスト教に改宗することを、法廷の場で約束させられる。かくして「正義」のみに固執して、「慈悲」を施すことを忘れたシャイロックは、彼の人生においてかけがえのないもの、つまり愛娘、財産、信仰などを失ってしまい、「彼の悲劇」はここにおいて極まるのである。

## 喜劇的ハッピーエンディング

この喜劇の作家シェイクスピアは、裁判も一件着落をし、アントーニオを救済したバッサーニオたちが、婚約者の待つベルモントへ向かうため、ヴェニスに最後に別れを告げる前に、もう一つの

サブプロット（指輪をめぐる婚約者たちの攻防）を上手に発進させている。それはこの劇の主要な命題「神のごとき友情」（第一幕）を想起させ、親友二人（アントーニオとバッサーニオ）をもう一度「神ごとき友情」を賭けて「試し」に遭わせるものであった。

BASSANIO. Good sir, this ring was given me  
by my wife,

And when she put it on she me vow

That I should neither sell nor give nor  
lose it.

ANTONIO. My lord Bassanio, let him have  
the ring.

Let his deservings, and my love withal,  
Be valued' gainst your wife's  
commandement. <sup>16)</sup>

バッサーニオ. この指輪は、実は、そのう、妻の贈り物なのです、この指につけながら、妻は私に誓言させました。けっして売りも譲りもなくしもしない。

アントーニオ. お願いだ、バッサーニオその指輪をあげてくれ、奥さんのことも大事だろうが、ここは一つ、あの方の働きとおれの友情を考えてくれな

い。このような経緯で、バッサーニオは、親友の頼みならば、最も大切な持ち物でさえ手放す用意があるということを証明するために、自分が死ぬまで身につけておくとして将来の新妻に誓った指輪を、一度は断ったが親友アントーニオのたつての願いで、名裁判のお礼として、法律家（実は変装したポーシャ）に請われるままに彼女のところへ持たせてやってしまうわけである。

この喜劇の終幕の構成上、バッサーニオが、命をかけて求婚のための軍資金を調達してくれた親友アントーニオに対して、そのお返しとして「神のごとき友情」のテストを断ることはあり得ない。またシャイロックとの裁判で大勝利の立役者であるポーシャが、そのお礼にと願った指輪を手に入

れられないはずがない。侍女のネリッサも同様に、婚約者のグラシアーノから彼女の指輪を巻き上げてしまうことになるのは火を見るより明らかと言える。

そして、この喜劇の大団円はヴェニスではなくベルモントで迎える。そこでは駆け落ちしたロレンゾとジェシカ（シャイロックの娘）が待っているところに、夜明けを待つことなく最初に帰って来たのが、ポーシャとネリッサの女性陣。続いてバッサーニオ、アントーニオ、グラシアーノたちの男性陣。そして、早速、必然ではあるがしかし観客と女性陣にとってはコミカルでしかない、「指輪の紛失」をめぐる口論が夫婦となる二組の間で沸き起こり、観客を楽しませてくれる。

PORTIA. Even so void is your false heart of  
truth. By heaven, I will ne'er come in  
your bed  
Until I see the ring.

NERISSA. Till I again see mine!...

BASSANIO. Sweet Portia,  
No, by my honour, madam! By my soul  
No woman had it, but a civil doctor,  
Which did refuse three thousand ducats  
of me  
And begged the ring, ...  
Even he that had helped up the very  
life of my dear friend ...  
I was enforced to send it after him.  
I was beset with shame and courtesy.  
My honour would not let ingratitude  
So much besmear it. Pardon me, good  
lady! ...

ANTONIO. I am th' unhappy subject of these  
quarrels ...

BASSANIO. Pardon this fault, and by my soul  
I swear  
I never more will break an oath with  
thee.

ANTONIO. I once did lend my body for his  
wealth, Which but for him that had  
your husband's ring

Had quite miscarried. I dare be bound  
again, My soul upon the forfeit, that  
your lord

Will never more break faith advisedly.<sup>17)</sup>

ポーシャ. そう、そのようにあなたの不実な  
心には真実はないのね。天に誓って、  
あなたとはベッドをともにしません、  
あの指輪を見せていただくまでは。

ネリッサ. 私もそうします、私の指輪を見せ  
ていただくまでは。

(省略)

バッサーニオ. 違うのだ、私の名誉にかけて、  
私の魂にかけて、あれを持っている  
のは女ではない、法学博士なのだ、  
彼は私の申し出た三千ダカットの金  
を断り、あの指輪をせがんだ、(省略)  
私の親友の命を救ってくれたその人  
がだ。(省略) 私はとうとう後を追  
わせて指輪を贈るよりほかに道がな  
かった、恥と義理に攻め立てられて。  
私は名誉に傷をつけ、恩知らずとい  
う汚名を着せられたくはなかったの  
だ。だから許してくれ、ポーシャ。

(省略)

アントーニオ. もとはと言えば悲しいことに  
この私が喧嘩の原因だ。(省略)

バッサーニオ. 今度だけは許して欲しい、こ  
の魂にかけて二度と君に対する誓言  
を破らないと誓うから。

アントーニオ. この体は一度ご主人の幸せの  
ために抵当に入れたもの、そしてあ  
の指輪を受け取った男がいなかった  
ならば、今はとられて消えていたは  
ず。それならもう一度、今度は魂を  
抵当にして誓います、ご主人は二度  
と故意に誓言を破りはしまし。

今度は体ではなく「魂を抵当にした」アントー  
ニオの仲裁で、夫たちが心から謝罪し、「今度こ  
そ決してなくさない」と誓って、改めて婚約者た  
ちから指輪をもらおうと、なんとその指輪はヴェニ  
スで法学者たちに自分たちがあげたのと同じ指輪

というわけである。

そして、ポーシャとネリッサが、裁判の勝利へ導いたそのお礼に指輪をもらったものと告白し、驚愕する夫たちに、変装してヴェニスに行ってきた真相が、彼女たちから、つまり、アントーニオ救済に果たしたポーシャとネリッサの役割が明かされる。さらに、ロレンゾーには、シャイロック死後、彼の遺産を相続できることの約束がもたらされ、ジェシカには、父シャイロックのキリスト教への強制改宗の知らせも告げられる。最後にアントーニオの持ち船の奇跡的帰還というも朗報ももたらされ、シェイクスピアの喜劇ワールド全開で、劇はめでたく終わる。

## おわりに

この『ヴェニスの商人』という喜劇は、ヴェニスとベルモントという、いかにも異質で対照的な大都市と地方都市によって展開され、バッサーニオとポーシャの結婚とそれによって派生する「神のごとき友情」の試しというメインプロットの他にも、いくつかのサブプロット（婿選びのための箱選びのテスト、指輪をめぐる顛末における二度目の試しやキリスト教徒と異教徒との駆け落ちなど）が複雑に絡み合う。登場人物としてヴェニスの豪商（アントーニオ）、ユダヤ人の高利貸し（シャイロック）、ベルモントの貴婦人（ポーシャ）などの複数の主役級の人物をはじめ、モロッコやアラゴンの大公などの狂言回しを演ずる脇役を配置し、この喜劇に彩を添える役を果たさせている。場面は法廷で胸の肉を切り取ろうとする、あわやの息詰まる「人肉裁判」場面があるかと思えば、夜空に瞬く星を仰ぎながら、ロマンティックな恋人同士の語り（第五幕第一場のロレンゾーとネリッサのやり取り）なども導入など、緊張とサスペンス、またはその緩和が交互に繰り返されるメリハリのある構成となっており、読者または観客を飽きさせない。

以上のように、戯曲を賑やかにするための派手な趣向、気の利いた思いつきというだけではなく、シェイクスピアの多面的なアプローチの方法に

よって、作者の多彩な資質、創意にあふれた才能を、この戯曲によって、われわれ読者または観客は満喫させられる。そして、この戯曲の多面的な構成、多彩な人物像が生み出された背景には役者及び座付き作家としての彼の経験一家族に劣らず、むしろ家族以上に親密な関係にあった劇団員の一人一人に、それぞれ演じ甲斐のある面白い役、または観客の共感を得るに足る魅力的な人物を演じさせ、また自分も演じた一が関係しているのではないと思われる。

シェイクスピアの主な喜劇は文字通り喜劇（コメディ）であって笑劇（ファース）<sup>18)</sup>ではない。そこには笑いは存在するが、それは諧謔の血の通った深みのある笑いでこそあれ、単なる馬鹿笑いではない。皮肉も風刺もある。しかし、それらの対象と作者であるシェイクスピアは同じ悩みと喜びを共有している。

この問題は、アントーニオ、バッサーニオやポーシャなどのキリスト教徒とユダヤ人シャイロックの対立の構図に顕著である。異民族問題が繊細かつ重要な問題となってきた今日、私たちの眼はもはや平板な見方でシャイロックを捉えることはできなくなってしまうのも事実である。特に2001年のいわゆる9.11の多発テロ事件以降、400年前にシェイクスピアが仕掛けたドラマは、新たな意味を持ち始めていると思われる。虐げられた民族が、その正義のためであろうと殺人は許されないのである。この戯曲においては、シャイロックも民族の神に誓って正義を行おうとしたが、結局は、ポーシャの機転による裁きで、単なる殺人未遂者として処理されることになってしまう。しかし、現代の我々には、この作品を読み終えたあと、めでたしめでたしという単純な話では終わらせられない、昨今の世界の状況が存在するのも否定できない。

この戯曲の登場人物である、ヴェニスの商人の「善良なキリスト教徒たち」の態度に、強大国が正義を振りかざして強者の論理だけで異文化問題を解決しようとする一方的な姿勢が重なって見えてこないだろうか。確かにシャイロックの殺人未遂は罰せられなければならない。だが、彼を罰することだけで問題は解決するのだろうか。そもそも

シャイロックに改宗まで強要する権利が「善良なキリスト教徒たち」にあるのだろうか。シャイロックは悪党だが、単純に悪党として切り捨ててよいのだろうか。この「喜劇」には、あまりにも多くの問いが發せられている。だからこそ、この作品には、今日的な意義があるように思われる。

自国の文化の外側にいる他者への無理解がそもそも不幸の元凶になっているという構図は、シェイクスピアの時代から現代（21世紀）に至るまで変わっていないのである。ヴェニスのキリスト教徒たちの「強者の論理」の暴力性は、昨今のニュースを賑わしている英米などの異教徒やその関係諸国に対する態度のみならず、われわれ日本人の対アジアの態度にも見られはしないだろうかなど、を考えさせられた作品であった。（『ヴェニスの商人』のテキストの頁数は、Shakespeare, William: *The Merchant of Venice*, Edited with a Commentary W. Moelwyn Merchant Introduced by Peter Holland, Penguin Book, 2005 による。）

#### 【注釈】

- 1) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.40
- 2) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.52
- 3) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.47
- 4) 小田島雄志『シェイクスピアの人間学』新日本出版社 2007, p.47
- 5) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.70
- 6) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.70
- 7) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.70
- 8) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.75
- 9) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.75
- 10) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.75

- 11) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.75
- 12) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.75
- 13) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.75
- 14) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.76
- 15) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, pp.79-80
- 16) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, p.85
- 17) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, pp.94-96
- 18) 「笑劇」（ファース、Farce）とは、本来、ギリシャ以来19世紀半ばまでの下品なドタバタ劇のことをさす用語だが、イギリスやフランスでは芝居の合間の軽い狂言のことも意味した。『世界演劇』より

#### 【参考文献】

- 1) Charlton, H. B. *Shakespearian Comedy*, Methuen & Co. Ltd. 11 New Fetter Lane London, 1966
- 2) Ludowyk, E.F.C. *Understanding Shakespeare*, University of Ceylon 1964
- 3) Shakespeare, William. *A Mid-summer Night's Dream*, Edited with Introduction and Notes by Sanki Ichikawa and Takuji Mine, Tokyo Kenkyusha 1963
- 4) Shakespeare, William. *Hamlet*, Edited with Introduction and Notes by Sanki Ichikawa and Takuji Mine, Tokyo Kenkyusha 1963
- 5) Shakespeare, William. *King Lear*, Edited with Introduction and Notes by Sanki Ichikawa and Takuji Mine, Tokyo Kenkyusha 1963
- 6) Shakespeare, William. *Macbeth*, Edited with Introduction and Notes by Sanki Ichikawa and Takuji Mine, Tokyo Kenkyusha 1963
- 7) Shakespeare, William. *Othello*, Edited with Introduction and Notes by Sanki Ichikawa and Takuji Mine, Tokyo Kenkyusha 1963

- 8) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, Edited with a Commentary W. Moelwyn Merchant Introduced by Peter Holland, Penguin Book, 2005
- 9) *Shakespeare' Critics: From Jonson to Auden: A Medley of Judgments* Ed by A.M. Eastman and G.B. Harrison 1964
- 10) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, Edited by John Russell Brown, The Arden Shakespeare, Cengage 2007
- 11) Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*, Edited for by Syndics of the Cambridge University Press 1953
- 12) 青木和夫・丹治竜郎・安藤和弘編著『知っておきたいイギリス文学』、明治書院 2010
- 13) 小田島雄志『シェイクスピアの人間学』新日本出版社 2007
- 14) 小田島雄志『シェイクスピア名言集』岩波書店 1985
- 15) 小田島雄志『シェイクスピア物語』岩波書店 1981
- 16) 河合祥一郎・小林章夫『シェイクスピアハンドブック』－「シェイクスピア」のわかる小事典－』、三省堂 2010
- 17) 河合祥一郎『シェイクスピアの男と女』（中公叢書）中央公論社 2006
- 18) 喜志哲雄『シェイクスピアのたくらみ』（岩波新書）岩波書店 1983
- 19) 坂本和夫、来住正三編『イギリス・アメリカ演劇事典』新水社 1999
- 20) シェイクピア、ウィリアム 安西徹雄訳『ヴェニスの商人』光文社 2007
- 21) シェイクピア、ウィリアム 河合祥一郎訳『新訳 ヴェニスの商人』角川書店 2005
- 22) シェイクピア、ウィリアム 小田島雄志訳『ヴェニスの商人』（シェイクスピア全集Ⅱ）白水社 1985
- 23) シェイクピア、ウィリアム 小田島雄志訳『ヴェニスの商人』（白水Uブックス）白水社 1983
- 24) 中野里浩史著訳『講座イギリス文学作品論 22』シェイクスピア＜喜劇1＞英潮社 1977
- 25) 名古屋シェイクスピア研究会『シェイクスピア再入門』風媒社 2006
- 26) 平井正穂『イギリス文学史』筑摩書房 1968
- 27) ビニャール、ロベール(岩瀬孝訳)『世界演劇史』白水社 1969
- 28) 福原麟太郎『英文学研究法』南雲堂 1962
- 29) 松岡和子『深読みシェイクスピア』（新潮新書）新潮社 2011
- 30) ミルワ、ピーター 安西徹雄訳『シェイクスピアの人生観』＜新潮新書＞新潮社 1985
- 31) 村岡健次、河北稔編著『イギリス近代史』（改訂版）－宗教改革から現代まで－ミネルヴァ書房 2003
- 32) メイ、ロビン(佐久間康夫編訳)『世界演劇事典』開文社出版 1999
- 33) 矢本貞幹『イギリス文学思想史』、研究社 1968
- 34) 山田勝『イギリス貴族』——ダンディたちの美学と生活——創元社 1994